

# 「みんないっく」を通じた生徒指導機能の向上に関する実践的研究

学籍番号	159954
氏名	木田哲生
主指導教員	深野康久

## 1. 不登校と眠育

わが国のこれまでの不登校（登校拒否）観を文部科学省が発刊している生徒指導資料から整理すると、「心の問題」を中心としながらも、近年はそれに加え「進路」「人間関係」の問題として捉えられていることが理解できる。

不登校について三池輝久は、子どもたちの睡眠の乱れは認知脳機能の低下をもたらし、不登校の多くは、そのような睡眠の乱れた生活を送ることで発症する「小児慢性疲労症候群」であると指摘する。学校教育においては、子どもたちの睡眠への理解を深め、睡眠を中心とする生活習慣の改善を目的にした「睡眠教育」の実践が行われている。実際に勤務校で睡眠調査を行ったところ、全校生徒に比べ不登校生徒の「入眠時間」が遅く、定時に就寝する割合が低かった。以上の実態を踏まえ、生徒の不登校等の改善を目的に、「睡眠教育（みんないっく）」に取組みはじめた。

## 2. 校内における「みんないっく」実践

校内の「みんないっく」実践の中で、指導の起点として重要なのは学期に2回行う「睡眠朝食調査」である。睡眠朝食調査で実際の睡眠状況を確認すること、言い換えれば自分の「現実」を捉えることが「みんないっく」のスタート地点となる。その他にも「教材開発」「みんないっく授業」「みんないっく面談」等を実践した。その結果平成27年度末、不登校ならびに欠席がちな生徒49名のうち16名(32.6%)において明確な登校改善が見られた。また全校生徒の睡眠改善や体調不良の改善、『堺市「子どもがのびる」学びの診断』によれば、「自分にはよいところがあると思いますか」「授業に集中していますか」といった質問項目で全校での改善があった。

## 3. 校内組織の編成と運営

ここでは、不安の中でスタートした「みんないっく」を推進した校内の組織運営について、その中心組織となった「みんないっく実行委員会」を中心に述べ、さらに組織運営上、キーパーソンである校長、教頭、生徒指導主事、養護教諭、の4人に半構造化面接を実施し、個人としての変容を合わせて分析した。特に組織変革の起点として「危機意識」「現状への疑問」「変革への期待」を重視するとともに、佐古氏の組織開発論に依拠しながら、「みんないっく」の推進組織の「協働化」を構築した。

はじめは2～3人の積極的な人間によって活動していたものが、少しずつ前向きに活動するメンバ

ーが増えていった。全体の構図として、ミドルリーダーが職員の中心となって実践に取り組む（挑戦する）ことが大きな組織変革を生み出し、そして管理職の学校経営が組織変革を継続・充実させていることが明らかとなった。

## 4. 「みんないく」に関する研修会

「みんないく」に関する研修会のうち、特徴的な「校内研修会」「養護教諭研修会」「リーダー研修会」を述べる。「校内研修会」は、学校職員の睡眠を改善することを主目的とした研修を実施した。その理由は27年度調査において、幼保・小・中ともに教員の睡眠に一番課題が多いことが明らかとなったためである。「養護教諭研修会」後のアンケートからは、養護教諭のこれまでの経験の中で、子どもたちの睡眠に問題意識を持っていたという言葉が多く、今後、養護教諭に加え管理職やその他の職員が組織的に取り組む必要性が浮かび上がった。また「リーダー研修会」は堺市内の学校園、行政、地域住民が参加し、年間7～8回の継続的な研修を実施する中で、普段からも交流する場面が出てきており、今後も「みんないく」を推進するネットワークとしての機能が期待できる。

## 5. 学校と地域の連携・協働

本校では、地域内に存在する幼保こども園、小学校、中学校におけるそれぞれの教員、保護者、そして地域住民、保健センターの保健師、教育委員会職員、大学教員、医師といったメンバーが連携し、地域全体で「みんないく」を推進するための外部組織「早寝早起き朝ごはん推進委員会」を平成27年度に結成した。組織の特徴として、メンバーの所属が多様で文化が異なることに加え、職位も教諭や管理職、指導主事など様々で、一般的には「対等」に関わるのが難しい組織だと言える。

ここでは、「みんないく」をツールとした学校と地域の連携の実践過程から、学校と地域の連携・協働の在り方、また学校を中核としながらも多様な立場の人間が混在する組織において「協働」が生まれる要因について考察した。その結果、①実践を通じての活動意義の「実感」、②「差し手意識」と「効力感」、③対等な関係の構築、という3点に整理できた。

## 6. まとめと考察

「みんないく」の効果的な実践方法の検証について「睡眠朝食調査」「みんないく授業」「みんないく面談」等の取り組みが、職員（職員研修）、専門医（指導・助言）、保護者（PTA活動）の三者によって生徒の睡眠改善に効果的に働くことが「みんないく三角形」としてまとめられた。また校内体制として「みんないく三次元支援」を活用することで、「予防」を軸とした実践が展開できる。

「学校と地域との連携」については、「個別自律的実践」「共通理解の醸成」「協働実践」の3段階を通じて協働化が進むことが明らかとなる。さらに生徒指導機能として「データをもとにした生徒指導」「問題行動の早期発見」という直接的な生徒指導機能が向上するとともに、生徒指導機能を支える「職員の成長」「校内組織体制の改善」「外部支援の充実・連携」の改善が進んだ。